13. 蔦細道蒔絵文台・硯箱

蔦細道蒔絵文台・硯箱　（御在来）

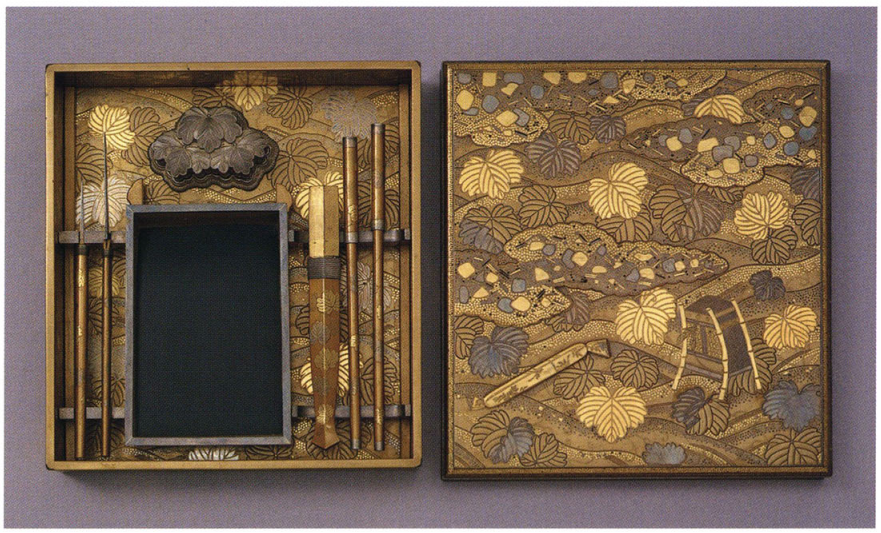
一具
木製漆塗、蒔絵
文台：34.9×59.7×9.5　硯箱：28.8×26.7×7.0
安土桃山時代（16世紀）

『伊勢物語』の一節を主題とした作品。蔦は宇津山を表し、笈と結文は主人公が山中で出会った修験者と彼に託した都の女への文を象徴している。高蒔絵を基本に金銀の金具、切金を多用し、繊細に蔦を彫り出した銀製の金具を装着して華麗な作品に仕上げられており、安土桃山時代の気風をよく伝えている。

Set of a stationery stand and ink-stone box with narrow ivy road design in *makie*, transmitted in the Imperial Court

makie on lacquered wood
stationery stand：34.9×59.7×9.5　ink-stone box：28.8×26.7×7.0
Azuchi-Momoyama period, 16th century

The theme of these pieces are the scene when a hero travels east from Kyoto in the *Tale of Ise*. The ivy vines express Utsunoyama, and the *oi* (backpack) expresses the mountain ascetic who a hero entrusted a letter to a woman he left in Kyoto, also expressed within this design. It is gorgeously depicted with gold and silver plates together with *taka-makie*, decorated with silver metal fittings in the form of exquisitely carved ivy, showing the spirit of the Momoyama era.



硯箱内側と蓋表

文台表面

<参考> 蔦細道蒔絵文台・硯箱〔旧桂宮家伝来〕

<参考> 蔦細道蒔絵文台・硯箱〔上杉家伝来〕

3件の同意匠作品 ―制作技法の違いを解明

当館には全く同じ形式をもつ3件の「蔦細道蒔絵文台・硯箱」が所蔵されており、いずれも意匠の細部までよく一致している。当館所蔵以外にも、これらに非常によく似た17世紀に制作された作品があり、この「蔦細道蒔絵文台・硯箱」は、桃山時代から江戸時代初頭に、精巧な写しが幾つも作られたことが示されている。当館の3件の来歴は次のようである。

①〔御在来〕：少なくとも18世紀後半には宮中に伝えられていたと考えられる品（本展で紹介）。

②〔旧桂宮家伝来〕：明治9年、桂宮淑子内親王献上。

③〔上杉家伝来〕：明治8年、旧出羽米沢藩主上杉齋憲献上。

①〔御在来〕と②〔旧桂宮家伝来〕は、蒔絵の細部表現にやや違いがあるものの、よく図様の配置が一致し、同じ下図を元に制作され、その時期もほぼ同じ頃と考えられる。③〔上杉家伝来〕は文台の裏にまで蒔絵をしている点や、切金が大きく切り抜かれ、全体に表現が誇張されていることから、①〔御在来〕と②〔旧桂宮家伝来〕あるいは同様の別作品を写しているようである。

①〔御在来〕と②〔旧桂宮家伝来〕については、素地や構造に破損は無いが、特に硯箱の高蒔絵部分に、下地層の浮き上がりが生じていた。また、蒔絵全体にわたって切金や金貝など金属の薄板が浮き上がり、剥落も多く、現状を保つためにも修理を行う必要があったことから、①〔御在来〕については平成15・16年、②〔旧桂宮家伝来〕については平成17・18年と2カ年をかけて、修理を行った。

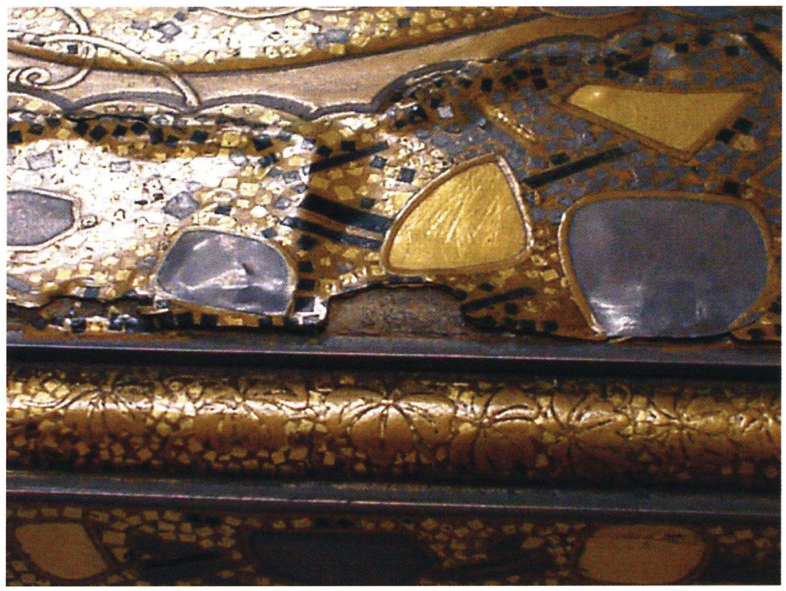
修理に際して最も問題になったのは、①〔御在来〕と②〔旧桂宮家伝来〕のいずれについても、硯箱の高蒔絵の部分が、下地から水泡のような形状に膨れ上がり、特に②については蒔絵層の亀裂や剥落が見られたことである。この原因を探るため、①〔御在来〕と②〔旧桂宮家伝来〕の修理を行う前に、3件の作品について、東京文化財研究所の協力を得て、X線透過写真を撮影し、その撮影画像から、3件の硯箱それぞれが異なった下地が施されていることが判明した。（57頁図版参照）

①〔御在来〕の硯箱の蓋は、雲と笈、地面の高蒔絵部分に、大まかに形に添うようにもやもやとした白い部分が撮影された。下地に金属の粉か粒のようなものが蒔かれていると推測される。②〔旧桂宮家伝来〕の硯箱は、雲の形に添って適当に切り抜かれた金属板が配されている。下隅には三角や台形などに切り取られたものを石畳のように寄せて配置している。後に改めて蛍光X線調査を行い、この金属板が、鉛であることが確認された。③〔上杉家伝来〕については、下地は透過されてほとんど影がなく、通常の漆下地に見受けられる。文台については、いずれにも下地に金属が使用されている様子はない。

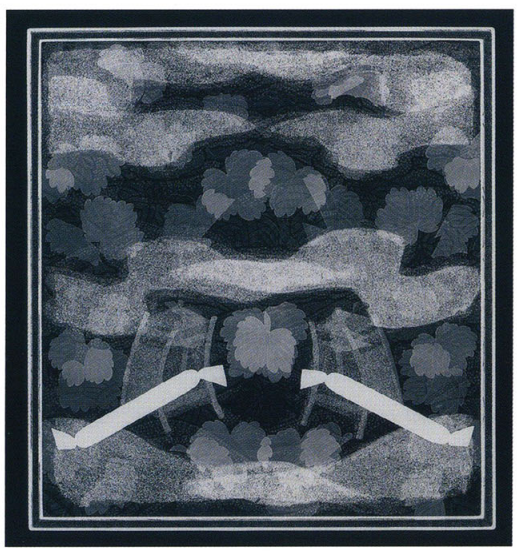
これらの様子から、①〔御在来〕と②〔旧桂宮家伝来〕の外見は非常に良く似ているが、下地が大きく異なり、金貝などの装飾に用いられた金と銀の薄板の厚みにも違いがあることが確認された。この調査を踏まえて、硯箱の破損状態と照らし合わせた結果、下地に使用された金属が経年で腐食して膨らみ、表面の蒔絵層の浮き上がりの原因となっていることが明らかになった。

修理材料には、合成樹脂などの新しい素材を使うことも検討したが、破損状況から、将来的に修理材料の除去は難しいことを考慮して、漆を用いることにした。まずは、全体に経年の汚れが付着しており、精製水とエタノールでクリーニングを行った。①〔御在来〕の高蒔絵の浮き上がり部分については、亀裂がなく、漆を注入して補強できないため、現状のままとし、切金などの浮き上がり部分を漆で接着した。剥落片についても位置を確認してできるだけ元の場所に戻して接着した。②〔旧桂宮家伝来〕の作品では、蒔絵層が浮き上がり、亀裂が開口している部分には、蒔絵層を補強するとともに、鉛の腐食面に漆の皮膜を作って腐食の進行を止めるために、漆を浸透させた。その後に亀裂の開口部の口際だけを塞ぐように処置した。①②いずれの作品も修理前には硯箱と文台がともにひとつの箱に納められていたが、硯が大きく、重量があることを考慮し、修理後は硯箱と文台はそれぞれ単独の桐箱を新調した。

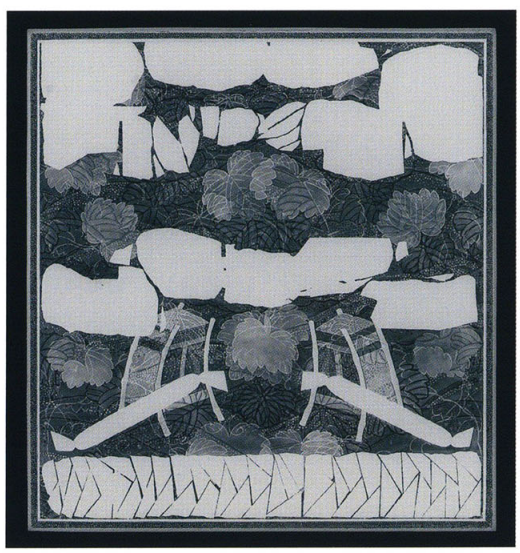
桃山時代の蒔絵を代表する作品として知られてきた①〔御在来〕と②〔旧桂宮家伝来〕の「蔦細道蒔絵文台・硯箱」は、いずれも伝統的な手法を駆使した緻密な高蒔絵による名品であるが、修理にともなう調査によって、現在の蒔絵技法では思いもよらない下地が施されていることが明らかになった。硯箱の下地に使用された金属粉や鉛板は、高蒔絵の工程を早く進めるための手法と考えられるが、こうした技法による漆工作品の例は、他に知られていない。金属粉や鉛板の存在をどう考えるか、現段階では結論づけるのは難しく、他の作例に同様の下地技法があるのか、報告を待ちたい。



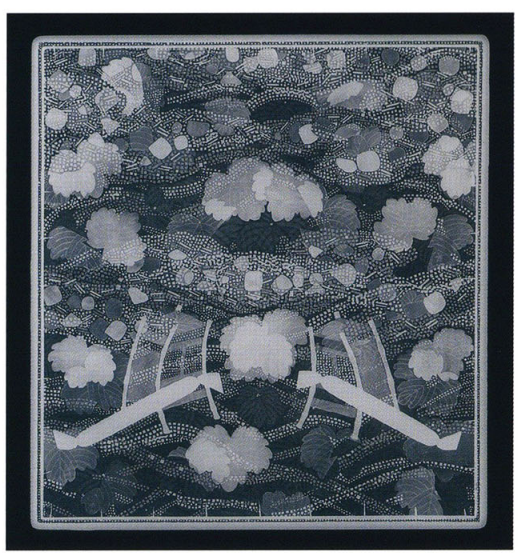
水泡状に浮き上がった蒔絵層
（〔旧桂宮家伝来〕の硯箱）



〔御在来〕硯箱　蓋のX線透過写真



〔旧桂宮家伝来〕硯箱　蓋のX線透過写真



〔上杉家伝来〕硯箱　蓋のX線透過写真

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

開館20周年記念
美を伝えゆく —名品にみる20年の歩み—

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成25年10月12日発行

© 2013, The Museum of the Imperial Collections, Japan

The 20th Anniversary Exhibition of the Sannomaru Shozokan
Passing Art works to the Future –The Museum's 20 Years of Research on Masterpieces–

Edited by the Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan
Produced by Tokyo Bijutsu Inc.
Translated by Hiroko Kurokawa
Published by Imperial Household Agency
Issued on October 12, 2013

© 2013, The Museum of the Imperial Collections, Japan